

## テーラーメイドの医療IT導入 ～将来を見据えた汎用性をめざして～

やたがいクリニック/東京都 谷田貝茂雄

### ○はじめに

「医療IT化」それは好むと好まざるにかかわらずわれわれの日常業務に入り込んでいます。一例が2009年のレセプトオンライン化で、「強制実行」との前振りで誰もがあわててしまい、どうしたらいいのか迷わされた方が多かったと思います。

あれから5年、「レセプトの電子請求」にはすっかり慣れました。しかしレセプト提出は電子化したとはいえ、いまだに紙印刷で「レセプトチェック（レセプト点検）」をしている先生も多いのが現状です。デジタルチェックをとりあえず行えば十分満足な点検ができるはずですが、あまり活用されていない先生が多いようです。ITの有用性を十分に活かせていないのが現状です。

よく「うちのレセコンはオンラインになっている」という話を聞きます。「オンラインレセコン」とは、インターネットにつながったレセコンが、ワンクリックで最新の診療報酬点数や薬価収載を反映することをさします。単に「オンライン請求ができるレセコン」とは違います。今後レセコンは仕様やタイプでIT化の活用範囲が変わってくるので、ぜひとも「うちのレセコンはどうか？」を今一度確認していただきたいと思います。

いまやわれわれ開業医の環境は、将来の医療IT化に向けて備えておく必要があるのです。それは院内の仕組み（器械類）をITでつなげる場面が多くなったからです。そこで、私なりに今後の参考にしていただけそうなことをまとめてみました。

### ○クリニックサイクルとクリニックネットワーク

「クリニックサイクルとクリニックネットワーク」は、私が提唱する医療のIT化を考えるとき

に必要なキーワードです。「クリニックサイクル」とは、「いま寿命がきそうな医療器械はどれか？」「いま壊れてしまったら困る医療器械はなにか？」などを認識することです。今の機器類、環境を一新してやり直すことはとても不可能です。医療器械の寿命や交換が必要なものから順番に「IT化」を意識して対応することが望されます。一番重要なものの（緊急度の高いもの）を考えると、私にとっては「レセコン」→「画像ファイリング」→「各種医療器械」の順番です。サイクルを考えることは将来に向けて「クリニックネットワーク」に関わる重要な方向につながります。「IT化」の意識なしに機器類を選択すると、いつまでたっても利便性があがりません。「クリニックネットワーク」とは、図1に示すように各種の機器類をどうつなげていくかということです。2000年くらいから心電図や超音波、血糖測定器などはパソコンと接続できるようにつくられています。しかしそれらを接続して電子カルテやパソコンに取り込んで閲覧する専用ソフトは数十万円と高価で汎用でない形式のことが多く、実際に使われていることは少ないので現実でした。近年ではデータの汎用形式はできてきましたが、各種のデータの集約部分はまだ課題が多そうです。各機器類が単独で稼働する時代は終り、クリニックレベルでも情報の共有化、無駄な作業を省く効率化を進めていく必要があります。報酬点数が右肩上がりにならない以上、時間も経費もIT化で有効活用していくことが必要かと思います。機器類の買替えは、今後のIT化に大きく関わることを含んでご選択ください。

### ○「テーラーメイドの医療IT導入」のために

医療でITとなると「レセコン」「画像ファイリング」「電子カルテ」等があげられます。これらの普及率は、レセコン96.8%・画像ファイリング

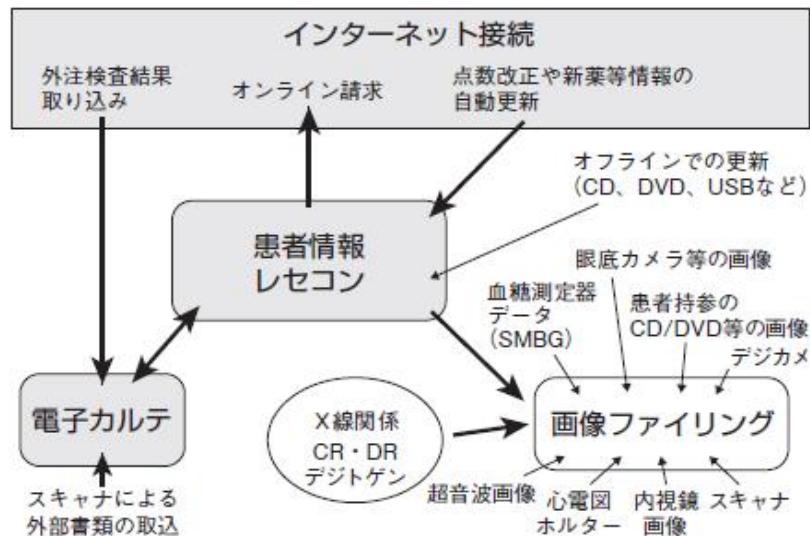


図1 クリニックネットワークの概念図

(CR等)70%・電子カルテ23.8%です(レセコン:2014年5月支払基金調べ、画像・電子カルテ:2012年シードプランニング社調査結果)。この数字からわかるように、X線機材を交換しようとするときには、もうフィルム仕様はなくCR機種を導入するしか選択がなくなってきた。CRでデジタル化した画像はファイリング/ビューワーの仕組みを導入しないと見ることができません。必然的にモニターで読影することになります。選択の余地がないので普及率は高くなっています。

では、電子カルテはどうでしょう。「毎回同じことを書くのが面倒」「カルテが厚くなってきた」「患者待ち時間が気になる、効率を上げたい」などの解決策を業者へ相談すると決まって、「電子カルテを導入しましょう」という返事になります。でもちょっと待ってください。今すぐ電子カルテが本当に必要なのでしょうか。システムに振り回され時間にロスが出た、患者さんの顔をみられなくなった、スタッフとの連携がギクシャクした、などの声が実際に導入した現場から聞こえてきます。原因は、困っていることを解決するため安易に電子カルテを選択したが、自分に見合うシステムになっていないから、と推察します。ここが肝心なのです。テーラーメイドの医療ITとは、「自分にぴったりくる医療IT」ということです。

医療ITを導入した結果、紙類はやめなくてはいけない、決められた通りにしなくてはいけない

など、応用がきかないように使われているのではないかでしょうか。すべての機能をうまく使いこなせればいいのですが、そうではない場合は「自分でできる部分だけを使う」「スタッフに手を貸してもらう」「アナログと併用させる」など、「自分にぴったりくる医療IT化」が大切なのです。既成の枠に無理やりはまろうとする使い方は、ストレスを増幅しITに苦しむだけとなってしまいます。いかに自分のクリニック運営にぴったりくる仕組みにするか、小さなITシステムを組み合わせて使うことこそ良いやり方だと思います。

### 身近で困っていることに医療ITを

みなさんパソコンを活用して手書きの仕事を減らしたいと思っていらっしゃるのではないでしょうか。私もその一人で、診療情報提供書や意見書、各種書類は全てパソコンで作成しています。文書作成で厄介なのは「患者情報の記載部分」です。カルテをみながら氏名・生年月日・住所・電話番号・病名・薬剤等を入れていく作業は、毎回同じ作業で苦痛に感じます。こういう部分がIT化で効率よくできないものか。そう考えながらも簡単に先に進めないのが現実です。

クリニックには「レセコン」があります。ほとんどの先生方はこのレセコンを請求行為目的以外にうまく活用できていないと思います。それは、

レセコンが請求行為にしか使えない(使わせない)道具だったからです。せっかくレセコンに患者情報や病名など他にも活用できるデータが記録されているにもかかわらず、レセコンメーカーからは「レセプト請求」だけで拒絶状態でした。まったく「ユーザー目線」ではないのです。

しかし、レセプト電子請求以降(2009年以降)はそうではなくなりました。レセコンを軸にして電子カルテや画像ファイリング、検査機器類をつなげて活用する時代になったからです。各システムの機能・性能があがって、今まで単体でデータを処理していた「つながらないもの」が、「つながるもの」として変化してきました。どのシステムも「患者情報」を必要とし、外部からの情報受入れ機能を持ち合わせるようになってきたのです。DICOM規格が良い例です。今まで二重三重の作業をして各システムに患者登録していたことが、レセコンから患者情報を取得できる仕組みが可能になったのです。このことから、各種の患者情報自動反映も現実になります。

請求行為にだけ使っていたレセコンは、今後は情報の発信元になるので、クリニックの「軸」として考えなおさなければならない状態になったといえます。データの活用はまさしくITで得られるわれわれの利益になります。

### レセコン、電子カルテ、画像ファイリングなどの「リプレース(買い替え強制)」のストレス

せっかく活用できる医療ITが身近にきてくれましたが、院内システムの「軸」になるレセコンもご多分にもれず、電子カルテと同様に「リプレース制度」がまだ残っています。「リプレース」の理由を聞いてみると、一番多いものは「メーカーの保守対応契約が切れる」です。また「OS提供元よりセキュリティ対応がなくなる(XPのサポートが2014年4月で終了)」「ご時世だから新しいものを(業者の思惑)」などなど、診療報酬に反映できない出費は大きなストレスです。すでに医療のIT化を始めているクリニックでは、レセコンや電子カルテが代わったり更新するときに、これらのシステムが動かなくなったり、最悪の場合「リプレースの代金」に加えて「やり直しの出費」をしなくてはなりません。そもそも、約5年毎に強

制的にレセコンや電子カルテを買い直さなくてはならないこと自体、素直に受け入れられません。

クリニックのIT化を考えるときに選択の枠が少ないので不幸なことです。さきに申し上げた「テーラーメイドの医療IT」ができなくなることにつながります。今は技術の進歩も早くすぐに良い道具が出てきます。価格も下がり便利が手の届くところに近づいています。それなのに、高価なレセコン専用機しか選択できない、サポートメーカーからしか買えないという制約は大きなストレスで、業者への不信感がつります。たとえばプリンターひとつをとっても、専用機だから10万円ですといわれて泣く泣く応じるしかない。この時代錯誤の対応は納得できません。

### ORCAは利点がたくさん

ORCAは日本医師会開発の無料レセプトソフトで、本来の意味で「オンラインレセコン」であり「つながるレセコン」の代表格です。パソコンで作成する各種医療文書もORCAから患者情報を取り込んで活用できるようになりました。たとえば「かかりつけ医の意見書」です。これは私は日本医師会の「医見書システム(無料ソフト)」を導入しています。この医見書システムを使えば「かかりつけ医の意見書」は変更のあった部分を書き換えるだけで、毎回の打ち込みの手間が省けて大いに助かります。

患者情報をCR機器に転送して患者情報の入力を省いたり、診療内容もラベルシール化し手書きを省略することもできています。このレセコンは汎用機器を使え、経済的にも大きな出費がなくなりて助かっています。いままではレセコン買替えのために300万円余りを5年毎に予算組みをしなくてはならなかったのですが、その資金を検査器具等の別なものに投資できることになりました。オンラインであることも今の時勢に合っています。スタッフは業務中に困ったことが起きたときサポート会社に連絡し、遠隔操作ですばやく問題解決しています。これは患者さんへのサービス向上にもつながります。会計がもたつけばおのずと患者にストレスを与え、診療にまで影響を及ぼすからです。新薬等の最新内容入手するのも、4月の点数改定対応も更新ボタンで短時間終了で

す。大騒ぎをして改定対応をしていたときが嘘のようです。オンライン請求も別途送信用のパソコンを用意することもなく、データの移動もないため間違いがなくなります。遠隔操作でシステムの整備も修復もしてもらえ、レセコン管理に関する重荷がなくなりました。レセプトチェック機能も進化し、月初のレセプト業務が残業なしの環境で済んでいることは、大きな収穫です。

このような本来の意味での「オンラインレセコン」となっているのはORCAとパナソニック（旧サンヨー）の2社のみで、「制約がない」という点でORCAをおすすめします。いまさらオフラインレセコンに戻すことはできません。レセコンはすでに「本来の意味でのオンラインレセコン」の時代なのです。

## ○ 選択のおすすめは「制約が少ないこと」

私はいまだ「紙カルテ」です。その理由は2つ。ひとつは、しっかりとしたレセコンに患者情報があれば将来電子カルテは単なる「メモとスケッチ」となり価格もきわめて安価になると考えるからです。まだ高価です。もうひとつは、電子カルテの互換性です。いまの電子カルテは別の電子カルテに乗り換えがききません。そのため「心中覚悟」で採用することになります。これでは導入後に何をいわれても従うしかありません。まさに囲い込まれ、逃げられない状態となります。電子カルテの互換性は地域医療連携にも欠かせないものとなるので、早期の互換性ルール構築をメーカーに期待しています。

医療IT化の将来を考えると、「レセコン」が主軸になり、「画像ファイリング」「電子カルテ」「医療機器」が情報を共有しあうと考えています。IT化の波は押し寄せてきます。最低限の仕組みを最初に検討し「制約」の部分を見極めてください。着手する順序は当然緊急度の高い部分からです。将来も見据えた選択が望されます。システムを拡大させて業者は売り込み（囲い込み）をしてきますが、現状で最低限必要な部分は何かを把握することが重要です。「これしかつながらない、できな

い」といった「制約あり」のものはなるべく採用しないようにしたほうが良いです。安価だからなど安易な判断だけは避けるようにしましょう。

レセコンの更新時期がくるという先生は、先述したようにレセコンを単なる事務機器としてではなく、医療IT化の「軸」として見なおしご検討ください。今のレセコンを確認し、自分のクリニックで医療のIT化すなわち「つながることが実現できるか」が重要です。これは、将来の電子カルテの導入にも関わってきます。

## ○ まとめ

本当にこのシステムが必要なのだろうか、この部分だけ効率良くならないか、などを最初に考えてみるとから私は医療のIT化を始めました。地域の先駆者や的確に答えを出す業者の意見を聞いて判断することが大事だと思います。地区医師会や業者が誘導する集団で行った「医療のIT化」「電子カルテ採用」「病診連携システム」などが残念な結果に終わった話は枚挙にいとまがありません。これはまさしく「自分に合っていない医療IT」となってしまったからでしょう。

医療ITは「道具」の一部です。良い道具を選び、使い方を工夫することで自分にぴったりくるIT環境が訪れます。「レセプトの電子請求」という整合化された形の実現と同じように、近い将来電子カルテや画像ファイリングも一元管理できる時代がくると思っています。

医療IT化導入は、診療の利便性が向上し最小限の出費で医業に専念できる環境にするために行われるものです。そのためには「クリニックサイクルとクリニックネットワーク」を考え、ご自分の施設にあったテーラーメイドの医療IT化導入をおすすめします。「ご時世（流行）だから」「すすめられたから」というような「流行の服や既製服」は体にしつくりこないことがあります。自分のクリニックは自分で守っていくしかないのです。本稿が少しでも先生方のお役に立つことを心から願っております。